

ビバハウス便り NO.108 何としても、ビバハウスを守りたい！～全国からのご支援で危機を脱出～

2015年10月10日 ビバハウス責任者 安達 俊子

若者達との一日の対応を終え、朝食の段取りをし、ビバハウス便り NO.108 を書くために机に向かったが、外は昨日の午後から真夜中まで大型の台風23号の影響で木々の枝葉がちぎれ飛ぶ程の暴風雨にみまわれたが、今は収まり、ほっとしてペンを走らせている。

先月の9月26日(土)・27日(日)に北海道教育大学札幌校を会場に、日本臨床教育学会・北海道臨床教育学会第5回研究大会(合同)が行われ、実践実例研究発表で夫(尚男)がビバハウスの「共同農作業体験による新たな若者自立支援の試み」を発表した。今回はひきこもり当事者としてビバ卒業生の江川翔平君にも協力をお願いし、下記で始まるレポートを提出してもらったので、当日尚男が代読した。

I. ビバハウスに至る経緯

江川 翔平

1999年6月のある日、私は学校という場所に通えなくなった。13才、中学2年生だった。わりと幸福な幼少期を経て、思春期と呼ばれる年齢に差し掛かる頃になると、周囲の環境も大きく変わり、私はその環境の変化のスピードに全く付いていけなくなった。そのストレスから、私は自らを擁護する為に、周辺環境そのものを異常なものであると見なし、ひいては日本の学校教育そのものに対し反発し敵対心すら抱くようになった。そんな想いを抱きながら1999年の春頃には身体の随所でストレスからくる異常がみられるようになった。免疫力の低下から全身に湿疹が現れるようになり、朝には毎日のように強烈な吐き気と腹痛を催すようになった。数ヵ月後私は家から一步も外に出られなくなってしまった。身体と心が本能的に学校という場所を拒んだのである。(以下略)

彼はこうした大変さを抱えながらも何とか前に進むためにと20歳の時、ビバにやってきて、ビバ卒業と同時にカナダに短期留学し少しずつ本来の自分を取り戻し、「大検」合格を果たして希望する大学へ進学し、卒業。現在再度余市に来て、福祉施設での仕事を始めているところだ。現在、経済的自立を確立し、来春からの道内大学院への進学を目指している。

ところで、退院まもない状態ながら夫が実践実例研究発表を実現できたのはビバハウス便り106号に掲載したビバ卒業生のお母さんが、再びボランティアとしてビバへ来て下さった事も大きな助けになった。

8月22日から10月4日まで前回同様、全力でビバの手助けをして下さった。スタッフ・メンバー共々お母さんには感謝の気持ちでいっぱいだ。

私の仕事の大部分を代わって頂いたおかげで、私は尚男の入院直後からの疲れも回復し、もうひと頑張りしようという気持ちにさせて頂いた。